

ラブ・フォーティ

テニスに魅せられて 徳弘晴輝

道場のようなクラブ ③⑩

家族でテニスをしている場合、家族の人数が多いと会費が多額になって経済的に大変です。これらを和らげるため一宮テニスクラブでは発足当初から、家族は何人いても、まとめて正会員の半額と決めています。当時は高知ローンテニスクラブの柳原のコートが台風で流されて、コートがない時でしたので、市内にあるのは愛宕山クラブと市営コートだけでした。

そんな時で前記割引制もありましたので、家族でテニスをしている人々が多く入会してくれました。そしてクラブが誕生した次の年から女性のための「ひまわり杯」というテニス大会を始めたところ、初年度でも90人もの参加があり、その後十年間ほど続けましたが、平均160人の参加がありました。始めた当時、新聞に「皇太子ご夫妻がご結婚のころ以来というテニスブームだ」と書かれるほどでした。

ママさんテニスが盛んになるとともに、必然的に一宮テニスクラブでも家族会員のジュニアが増えて、ジュニアのコーチをしてほしいという要望が出てきました。私も教えてはいましたが、前にもお話したとおり、自分の子供を教えるのは難しいのと、ちょうどその年（昭和54年）の春、高知医大に入学して、一宮テニスクラブに入会していた、二口稔君という強い人がいたので、彼に頼むことにしました。

彼は熊本県出身で、鹿児島大学の工学部を出て、一度社会人になった人です。しかし技術畑は自分に向いていないと気づき、医者を目指して再び医大に入った変わり種でした。この二口君が大学のテニス部出身で、九州のナンバーワンを続けていた人です。関西学生選手権で準優勝、全日本選手権でも三回戦に進出したことのある、豪快なテニスをする人でした。

この人は「教えるのは好きではない」という人でしたが、私が特にお願ひして、アルバイトで一宮のジュニアのコーチを夏休みをお願いしたのでした。その時のジュニアは私の三人の娘と、中山文子、高岡美奈、松木兄妹、山脇隆君でした。彼らはテニスの基本の真髄を、二口君からみっちり習いましたので、その後もすくすくと育って、それぞれが自分の持っている才能を十分に出し切れたと、私は思っています。

私の長女の美香は、武庫川女子大に進み、関西学生でベスト4、全日本でも二回戦まで行き、沖縄国体では高知県が初めてベスト4に入る原動力になりました。二女「香」と高岡美奈さんは、高知学園中・高へ進み、高校のときに山梨国体でベスト8になりました。中山文子さんと、私の三女の「晴美」は、プリンスカップの国内大会で優勝して、ハワイでの決勝大会でも優勝しました。山脇君は、当時全国制覇していた清風高校のレギュラーとして活躍し、明治大学に進んで、そこでも活躍しています。

これが初期のグループとすると、次のグループが宮崎雅俊、中越由紀・克宣の姉弟、竹内さやか・真美、野田仁菜・芽維、熊沢美早・美穂の各姉妹です。このファミリーテニスから育ったジュニアは全員が四国のトップに顔を出すほどに成長しました。

一般的に民間のクラブは大人が主体で、ジュニアは肩身の狭い思いをするものですが、当時の一宮クラブでは大人も子供も対等で、強い人たちが第一コートに、次のクラスが第二コートにと、順位が暗黙のうちに決まっていた、皆上位コートを目指して頑張っていました。私は練習中の人々にとときどきアドバイスをしながら、全体の和を保つために、気配りをするのが仕事でした。

ビジター（お客さん）の人に「一宮テニスクラブはまるで道場のようですね。緊張します」と言われましたが、その通りだと思いました。